

- 一、教育局ニ第一課、第二課及第三課ヲ設ク
- 二、教育局第一課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル
 - (一) 教育ノ統一及一般教育ニ關スル事項
 - (二) 兵學、航海術及運用術ノ教育ニ關スル事項
 - (三) 教育圖書ニ關スル事項
 - (四) 教育局第二課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル
 - 砲術、水雷術、潛航術、通信術ノ教育ニ關スル事項
 - (五) 教育局第三課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル
 - 機關術ノ教育ニ關スル事項

第二節 教育實施機關竝ニ教育制度

第一項 一般要旨及經過

帝國海軍ハ創設時代ヨリ夙ニ重キヲ教育訓練ニ置キ就中將校ノ養成ヲ以テ最モ急務ト認メ先ヅ第一着手トシテ明治二年九月海軍操練所ヲ創立シ將校ノ養成ヲ開始セリ而シテ海外ニ新智識ヲ求メシムル爲明治三年三月已ニ生徒ヲ英國軍艦ニ乗組マシムルアリ明治三年九月英海軍大尉「ホース」ヲ聘シ橫濱港ニ於テ龍驤艦内ニ砲術ノ操練ヲ爲サシメ各艦ノ將校下士卒ヲシテ之ヲ練習セシメ又各艦船ニ艦内教授役ヲ置キ普通學及武科ニ關スル下士卒ノ一般教育ヲ掌ラシメタリ當時少尉補ノ教育ハ各艦ニテ之ヲ行

ヘリ而シテ三年十一月海軍操練所ヲ海軍兵學寮ト改メ規則漸ク備ハリ將校養成ノ法略確立スルニ至レリ然ルニ水雷術ニ關シテハ未ダ一定ノ教育機關ヲ具備スルニ至ラズ僅ニ兵學寮ノ教科目中ニ水雷火ノ一項目ヲ留ムルノミナリキ(第一編第一章參照)

明治七年九月ニ至リ海軍省中ニ假ニ水雷製造局ヲ置キ水雷術ノ傳習ヲ開始(水雷製造ヲ主務トス)セルヲ以テ水雷術教育機關ノ嚆矢トスルモ元ヨリ假設的ノモノニ過ギズ又斯術傳習人員ノ如キモ極メテ局限セラレタル少數士官ニ過ギザリシガ明治十一年六月舊扶桑艦ガ當時最新ノ水雷兵器機材ヲ搭載歸朝シ英國人「ゼー、パール」ノ傭聘ト相俟ツテ同年八月ヨリ差當リ扶桑、比叡兩艦内ニ於テ將校及下士卒ノ水雷術ノ傳習ヲ行フニ及ビ斯術教育機關ノ曙光ヲ見ルニ至レリ是レ實ニ現海軍水雷學校ノ淵源ニシテ爾後内容施設及教科等ニ於テ幾多ノ變遷ヲ經テ今日ニ及ベリ其ノ詳細ニ就テハ別項ニ盡スガ如シ唯特記スベキハ此間海軍水雷學校及其ノ前身ニ於テ將校及兵科下士卒ノ外機關官(機關將校)ニ對シテモ水雷術一部ノ教育ヲ爲セシ期間アリシコト及大正九年所謂八八艦隊計畫ノ成立スルヤ特修兵大規模急速養成ノ必要上從來ノ海軍水雷學校ニテ行ハレシ普通科水雷術練習生教育ヲ各鎮守府防備隊ニ於テモ行ハシムルコトトナリシガ大正十一年再ビ海軍水雷學校ニ集中復舊セラルルニ至リシコト之レナリ明治三年創設セラレシ兵學寮ハ明治八年海軍兵學校ト改稱セラレ今日ニ及ビシガ此間水雷術ノ進歩ニ伴ヒ水雷術教育課目程度及教育時間等ノ改善ヲ行ヒ少尉候補生トシテノ練習艦ニ於ケル水雷術教育ト

ノ連繫ヲ保持セリ

明治二十一年八月海軍大學校創設ト共ニ甲號學生トシテ砲術等ト共ニ水雷術ヲ兼修セシメシガ二十七年五月水雷術教授細目ヲ定メ主トシテ高等ナル理論ヲ修メ實地ニ就テハ理論終了後水雷術練習所ニテ修得シ水雷術ニ關スル至高ノ職員タル素養ヲ與フルノ制ヲ採リ爾後乙種學生制度ヲ經テ大年七年乙種學生制度ノ廢止ト共ニ水雷術ニ關スル專科學生トシテ籍ヲ置クノ外、海軍大學校ハ水雷術教育機關トシテ殆ド其ノ影ヲ沒スルニ至レリ

水雷術ニ關スル専門技術官ノ養成ニ就テハ主トシテ部外、高等學府ヘノ委託ニ倚レリ